2012.1.21
異文化関係論演習
118c015c 中西光一

国際都市としての「南あわじ市」

南あわじ市は日本三大瓦（日本の瓦の三大産地）と呼ばれるものの一つに数えられる淡路瓦の生産地の一つとして知られる。また、国指定の重要無形民俗文化財の一つに数えられる淡路人形浄瑠璃は世界的にも知られ、それらは市の重要な観光資源ともなっている。

さらに「淡路島たまねぎ」の豊富な生産地としても知られ、市内に点在する５つの海水浴場では週末や夏休みには多くの観光客や地元民で賑わう。

このように、観光資源豊富な観光地としてまた農水産業が盛んな地としての顔をもつ南あわじ市であるが、この町にはもうひとつの顔がある。それは国際都市としての顔である。

国際都市としての顔を持つ南あわじ市には、220 人（平成 23 年 12 月末現在、南あわじ市公式 HP）の多国籍な外国人が住んでいる。ここでは、南あわじ市西淡町にある、とある食鳥処理場で働く外国人労働者を紹介しよう。

約 60 名の従業員を抱えるこの会社では、その半数が外国人労働者である。勤務時間は早朝の 5 時半から夕刻 16 時半までとなっている。多忙期には残業も多い。この写真は仕事終了間際に撮った処理場内の掃除場面である。

社長は幼い頃から外国人との関わりが多かった。ミッション系（キリスト教系）の学校に通っていた経歴を持ち、クラスの同級生には外国人や日本人がいた。その幼少期の体験が現在の外国人雇用に繋がっているのかもしれない。市内で初めて外国人雇用に踏み切った。

この会社ではブラジル人、中国人、フィリピン人そしてペルー人が働いている。左側の写真は、鳥の解体処理にたずさわるブラジル人の女性たち。右側は同じく解体処理にあたる中国人の女性である。

彼らの仕事は主に鳥の解体、分割、細切りである。男女別々に仕事にあたり、左側の写真は鳥の分割作業にあたるブラジル人の男性たち。右側は鳥の細切り作業にあたるブラジル人の女性たちである。お互い母国語で会話をし、日本語を話せないものも多い。日本人従業員とはジェスチャーなどで意思疎通をはかる。

外国人労働者はカトリック信徒が多く、処理場内の一角に彼らの祈りの部屋が設けられている。毎週末、部屋は外国人労働者で埋め尽くされ、彼らの一つの息抜きの場としての役割を持つ。

なぜ、南あわじ市に外国人労働者が存在するのか？

⇒近年、日本が直面している少子高齢化の問題にともない、都市部や地方に点在する多くの中小企業が労働力不足に陥り、その対策として外国人労働者が雇用されたからである。

外国人労働者は貴重な労働力として、これからもその需要が高まるかもしれない。南あわじ市も、日本が直面している労働力不足の問題とは決して無関係とはいえず、彼らの存在は今後どのような形で南あわじ市に影響を及ぼしていくのかは誰にもわからない。

このように南あわじ市は観光資源豊富な観光地としてまた農水産業が盛んな地としての顔をもつだけではなく、国際都市としての顔を持つ南あわじ市の外国人労働者を簡単に紹介した。